4月12日

日刊産業新聞

21年度上期市況見通し⑥

1万9000ドル予想

上半期のLMEニッケル3カ月先物はトン1万5000—1万9000ドル中心と予想する。昨秋から続騰し2月半ばに14年以来の大台2万ドルを一時超えたが、世界的な金融緩和を背景にした過熱相場だったとみる。3月に入ると、中国・青山集団が車載電池向けにニッケルマットを供給する報道や、露ノリルスク・ニッケルが地下水流入で停止した鉱山の再開計画を発表したことで、供給懸念が減退し相

三井物産　金属資源本部新金属・アルミ部ニッケル室長
南野弘毅氏

ニッケル

付近が妥当

上半期のニッケルのロンドン金属取引所（LME）相場はトン1万5500—1万8000ドルを推移すると予想する。

LME相場は昨秋から上値を追い、2月下旬には瞬間的に2万ドルに達したが、ファンドの売り抜けによって足元は1万6000ドル台まで下げている。海外の大手EVメーカーと資源メジャーがニッケル供給の長期契約を結び、電池向けの供給不安が薄れたことが引き金となったようだ。

電池に加えて中国のステンレス生産も伸びており、スクラップ原料輸入を再開したその買い気を見ても、当面の需要は底堅そうだ。コロナ禍で鉱山などの生産も抑制されて

超えの可能性は低い

金国際相場はトロイオンス当たり1600—1900ドルレンジが予測される。米国の長期金利上昇に伴う、インフレ懸念などで3月に1700ドルを一時的に割り込むなど値を落とした。米国政権は大型景気対策を相次いで打ち出す計画だが、資金源を借金に頼れば長期金利が上昇し金利を生む債券などに人気が集まる可能性がある。その際は金相場も1600ドル台へと落ち込む可能性が高まるだろう。

佳龍科技
広報担当兼
戦略アドバイザー
陸怡豪氏

オーファ

チタン材加工精度向上へ

鈴鹿拡張、名古屋に新拠点

チタン・ステンレス素材および加工製品の販売を手掛けるオーファ（本社＝千葉県浦安市、細川寿二社長）は、次世代自動車へのチタン材の活用に向け、精密加工能力の強化を図る。試作を中心にチタン製部品を年産1万個ほど生産可能な体制を構築する計画。それに伴い2021年度内をめどに鈴鹿テクニカルセンターを増築することに加え、名古屋市内に拠点開設を進める。

EV（電気自動車）やFCV（燃料電池車）など電動車を中心とした次世代自動車の普及が進む中、軽量で錆びにくいなどの特徴を持つチタンへの関心が高まってきている。だが、電動車に用いられるチタン製部品は、1000分台レベルの高度な加工精度が求められるなど技術的なハードルが高いものが多い。

同社は30年までに電動車の普及拡大が進むと予測。10年先の主力事業とするため、電動車での活用が期待されるチタン64材やニッケル系のアロイ718材の加工能力向上に向けた取り組みを進めることを決めた。

主力加工拠点である鈴鹿テクニカルセンターに約500平方㍍の建屋を増設し、CNC旋盤および検査設備を増設する。建屋内の温度管理を可能とし、より精密な加工に対応できる仕様とする予定。試作品を中心に対応を進め、日当たり300—500個ほどの生産能力の確保を目指す。将来的に試作から量産化に移行する際には協力企業と連携して生産を行う計画。技術力を強化することで電動車以外への技術活用も視野に入れる。

次世代車に期待されるチタン材

また、自動車産業が盛んな中部エリアでの営業力強化を目指し、5月に名古屋市内に営業拠点を開設する。ターミナル駅である金山駅近隣にオフィスを開設する予定。人員の増強なども行い、現地での対応力強化につなげていく考えだ。

LiBプラント地鎮祭

アサカ理研・いわき工場

ウムイオン電池（LiB）リサイクルプラント建築工事の地鎮祭を行った。同社からは油木田祐策社長や山田慶太会長など多くの役員が出席。地元いわき市にある諏訪神社の祈祷のもと、関係者が工事の安全を祈願した。油木田社長はあいさつで「社員一丸となってLiBリサイクル再生事業に取り組む」と話し、事業の発展に意欲を示した。

彦坂から台湾の地鎮の出席者が玉串を奉納した。

同社は年々増加する使用済みLiB再生事業の量産プラント導入に向け、約10億円を投じて工場増設を決めた。稼働は来年1月の予定。LiBが含むコバルトなどのレアメタルの分離回収と、精製・高純度化によるLiB原料への再生を行う。廃LiBからLiBグレードの原料に戻す水平リサイクルを目指す。いわき工場の敷

検査基準が厳しくないと分かってきたのだろ

数の製錬メーカーがこの半年あまりで精錬費

り返ってもおかしくない」（都内の直納問屋社

テリアルと位置づけ、価格変動リスクのヘッ

競合する。水酸化リチウム先物

日本、韓国のCIF（運賃・保険料込み）スポ

散らす。